

## 日暮里駅界限

児玉 寛嗣

日暮里駅は線路を挟んでどちらの出口に出るかで、街の雰囲気が大きく違う。南口を出るとそこは高台になっており谷中の墓地や、戊辰戦争で彰義隊を追った新政府軍の弾痕が山門に残る経王寺など寺が多い。上野の寛永寺に近いからか、まさに寺町である。反対側の北口を出て大通りを渡ると一風変わった通りになる。

通りの入口に「につぼりせんい街」と青字で書かれた柱が目に入る。この通り、日暮里中央通りには、洋服や和服の生地などの繊維資材をはじめとして、いろいろな種類の革の端切れ・紐・リボン・ボタン・洋服の型紙・アクセサリー等の専門店が百軒あまり軒を連ねている。なかにはミシンを並べた縫製教室のような店などもある。縫製、手芸などを楽しむ人たちが材料を探しに訪れる街でもある。

もともとは問屋街として全国各地の専門業者を相手に卸売りをする業者が店を構えていたが、平成に入った頃から小売り対応もする店が増えてきたとのことである。コロナ禍になってから、在宅時間が長くなったためか趣味として手芸などをやる人も増えて、なかなか繁盛しているようである。地方から買いにくる人も多い。京成スカイライナーで四十分弱と成田空港に近いこともあり、外国人もコロナ以前にはよく見かけたものだ。

明治時代までは布を扱う業者は浅草に集中していたが、大正に入ると浅草は観光地化してしまい、当時の条例によって業者は郊外に移転しなければならなくなった。そこで当時まだ閑散としていたこの地に大挙して引っ越してきたそうだ。その後も、続々と繊維業者が集まるようになり「繊維の街」となった。十分ほど歩くと繊維街を抜け、小学校が見えてくる。門の傍に『夕焼け小焼けの塔』がある。夕焼け小焼けの作詞者、中村雨紅はこの学校（第三日暮里小学校）に奉職中の大正時代に詩を作ったとの説明書きがある。

「寺町」「繊維街」「夕焼け小焼け」と、この界限の歴史の一端を垣間見た気がした。